長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列した中学生が平和の尊さを発表します

問 企画課 ☎7185－1426

我孫子市は8月8日から10日まで、市内中学校の代表6人を長崎市に派遣しました。長崎での体験を、12月2日(日)にけやきプラザホールで発表します。派遣中学生の皆さんの感想は次のとおりです(順不同)

長崎へ行き、感じたこと

我孫子中2年　濱原沙也佳さん

私は、昨年広島に派遣された先輩の報告発表を聞いて興味を持ち、今回の長崎派遣に参加してみたいと思いました。遠い昔の遠い場所で起きた、自分には関係のないことだと思っていた原爆や戦争というものが、恐ろしいことであり、忘れてはいけないことだと感じられ、もっと知りたいと思いました。

長崎は67年前に原爆が落とされ街が消えてしまったとは思えないほど美しく、平和な場所でした。しかし、原爆資料館に行ったり、被ばく体験者の講話を聞くことにより、原爆の威力や戦争、核というものが人の体にも心にも大きな傷を負わせてしまうことを実感することができました。私が一番衝撃を受けたものは、亡くなった人たちの写真や、私達と同じくらいの子ども達が原爆を受けた地で、生活していた様子の写真です。亡くなってしまった方は何を考えながら息を引き取ったのか、また残された人達はどのような思いで毎日を過ごしていたのか、想像すると胸が締めつけられるように悲しくなり、言葉が出ませんでした。

そして、今私達がとても平和で幸せな環境にいるということに感謝しました。私はこの悲劇を二度と起こさないようにするため、学んできたことを伝え、自分も平和を保つために周りの人達と仲良く、平等に接し、一つ一つのことをどうしたら更に良くなるのかを日々考えて生活していきたいと思います。

平和への願い

湖北台中2年　小谷典子さん

今回、長崎原爆犠牲者平和祈念式典に参加し、大切な三日間を過ごさせていただきました。

一九四五年八月九日、その日はとても天気の良い日だったそうです。しかし、十一時二分。爆風と共に全てが吹き飛ばされたのです。長崎の人々は原子爆弾と言うものも知らず無差別に犠牲となったのです。水を求めて川岸に集まった人はもがきながら、街をさまよう人々は大やけどを負い皮膚が垂れ下がった人など、長崎平和祈念式典の黙祷の時サイレンと平和の鐘が鳴り響く中、まぶたの裏で六十七年前の長崎の悲鳴が聞こえる様でした。

原爆資料館では、原子爆弾の投下された十一時二分のまま動かない時計、爆風でガラスの破片が刺さったまま成長した木の幹の断面、焼けた作業服。全てが原子爆弾の恐ろしさを伝えていました。世界と戦争を繰り広げ、平和の尊さを知った日本に生まれた一人として戦争を、原爆をもっと一人ひとりが考えなくてはと思います。

広島、長崎で被ばくされた方も少なくなり、私達が中心となって原爆の恐ろしさを伝えて行かなければいけません。原子爆弾は人を苦しませ傷つけ、むごい形で殺し、残った人も後遺障害でがんや白血病などに苦しまれる、在ってはいけない兵器だと伝え、身近な所から安心して笑っていられる世界にしたいです。

長崎に行って感じたこと

久寺家中2年　神原侑陸さん

長崎原爆資料館。そこは、原爆というものの恐ろしさを物語っていました。「焼けただれた人の写真」や「溶けた瓶」などの実物まで全てが戦争の被害を訴えていて、胸が苦しくなりました。僕は初めて本当の戦争の恐怖を覚えたのです。「戦争をしてはいけない」という思いが僕の心の中に強く残りました。被ばく者の方からアメリカ人が「もう戦争をしたくない」と言っていたことを聞き、この思いが世界の人々に伝わればとても嬉しいと思いました。

全国から集まった小中学生と平和や戦争について思うことなどを語り合うことで、平和を願う心は皆同じだと気付くことができました。二日目に長崎平和祈念式典に参加したとき、たくさんの方の話を聞き、今自分が、日本がどうあるべきなのかを考えさせられました。会場の周りにあった、たくさんの像からも像を彫った人たちの願いが伝わってきました。

平和な世界にするため、どうすればいいのか、小中学生の仲間と出した答えが、「相手を第一に考える」です。まずは、自分が日々の生活で相手の立場に立って考えていこうと思いました。

長崎派遣学習での感想

湖北中2年　金湖陽平さん

僕は、長崎派遣学習で、原爆のすごさと被害に遭った方の無念さを感じました。

原爆は、強烈な爆風、高温の熱線、放射線の３つの被害を出しました。原爆資料館には、高温で瓶が溶け、人の皮膚が垂れ下がっている写真、原爆の投下された十一時二分でとまった柱時計など原爆の威力のすごさを物語るものがたくさんありました。他にも、核兵器を持っている国や個数などの資料もありました。日本がこれほどの被害を受けているのに、原爆を所持している国があるというのはすごく残念な気持ちでした。被ばく者の方から直接話を聞き、放射線の恐ろしさについてもわかりました。がんになったり、白血病になったり、いつ発病するかわからない恐怖心があるそうです。

原爆について多くの資料を目にする中で僕は「日本の復興はすごい」ということも感じました。原爆から七十年は草も木も生えないと言われていたところ一年で生えてきたということもすごいなと思いました。

僕の長崎派遣学習は長崎に行って終わりではありません。みんなにどう伝えていくかが大切だと思います。原爆の被害者の平均年齢は七十代の後半になっています。そのうちただ一つの被ばく国の被ばく者がいなくなるときが来ます。その時、僕たちが引き継いで核兵器の恐ろしさを伝えていくことが大事だということを考えました。

生きていることに感謝して

白山中2年　川合瑞季さん

私が長崎の平和祈念式典に参加して、今自分達が当たり前のように生活して生きていることがどれだけありがたいことか感じました。

被ばく者の話や資料館の展示物にあった髪の毛がなくなった女の子、遺体の焼却場の前に立っている男の子など生々しい悲惨な戦争の状況を伝える写真を見て、本当に心が痛みました。私達若い世代は原爆や戦争を経験していないけれど、原爆と戦争の恐ろしさ、悲惨さを語り継いでいくことが私達の使命なのだと思いました。

原爆の犠牲になった唯一の国として日本が平和を訴え、一日でも早く戦争や核兵器のない世界を作り上げる事が平和な世界を作るために一番大事なことだと思います。きっとお互いの気持ちを尊重し合えば戦争と原爆投下は起きなかったはずです。アメリカは日本に原爆を落としたけれど日本も真珠湾を攻撃した事実があります。お互いがお互いを傷つけあっては何も解決しません。まずは小さいことだけれども自分が相手の気持ちを考えた行動をしていこうと思いました。

私は、周りの友達や家族、そして市民の皆さんに、自分が長崎で見て、聴いて、感じたことをしっかり伝えていきたいです。今自分たちが平和な世の中で笑顔あふれる生活ができていることに感謝して生きていきたいと思いました。

「戦争」と「核」のない世界へ

布佐中2年　吉田真悠さん

長崎へ行って何よりも学んできた事は「戦争」と「核」の恐ろしさです。ニュースでは、いつ戦争が勃発してもおかしくないような出来事が報道され、現に大勢の子ども、罪のない人々が犠牲となっている戦争が世界中で起こっています。しかし、日本はかつての悲惨な出来事を二度と繰り返さないために、話し合いで治めるよう努力しているのだと思います。私は長崎へ行って原爆の恐ろしさを初めて実感し、二度と戦争を起こしてはならないと深く心に刻んできました。

原爆が投下された時、人々は夥しい量の放射能を浴びました。当時は放射能というものすら知られておらず、それが後々まで人々の体を苦しめ続けました。スイッチを押すだけで何でもできる、そんな便利な生活に慣れて電力の大半を原子力に頼ってきた結果、昨年3月11日の大震災の時に原発事故を招いてしまいました。私たちは初めて「核」の恐ろしさを目の当たりにしました。私たちに「核」に対する知識があれば免れた事かもしれないのです。

私はこれからを生きていくものとして、そして次の世代につなげていくために、「戦争」や「核」の恐ろしさを少しでも多くの人に伝え、これから先ずっと安心して生活していけるような日本、世界をつくっていけたらよいと思います。

〈ご利用ください〉▶防災行政無線放送テレホンサービス（放送内容の確認）☎0120-031676　放送後約1時間経過後か、次の放送がされた場合は、情報が入れ替わります。　▶災害専用電話（台風や大雨で災害が発生したとき）☎7185-1743